



「切支丹高札」(教育棟二階に展示中の「隠れキリシタン遺品収集」より)
 「正徳元年」(1711年)の日付が入ったこの「高札」には、キリスト教が禁
 じられていること、ばてれん(司祭)を見つけた者には銀五百枚、いるまん(修
 道者)には銀三百枚、信者に立ち帰った者には同額、同宿(キリスト教に奉仕す
 る者)や信者には銀百枚のほつびを与えるなどの記されている。

秀吉や家康が恐れたユスト高山右近

宗教学特任教授・宗教主事 小田 武彦

来年は、キリシタン大名ユスト高山右近がマニラで死去して四百年にあたります。終焉の国フィリピンでは大きな記念祭が企画されているようです。右近の生涯を簡単にたどってみましょう。

日本にキリスト教が伝えられてまだ十数年の1563年、十歳の右近は家族と共に洗礼を受けました。洗礼名はユスト(「義の人」の意味)です。七三年、父の隠居に伴い右近は高槻(大阪府)城主となり、翌年には城内に天主教会堂を建設しています。ちなみに、1998年に天主教会堂跡から十字の印が付いた木棺やロザリオ(カトリック教会祈祷用の数珠)が多数発見され、現在それらは高槻市立しるあ歴史館に展示されています。

一五八五年、秀吉は、四国平定に貢献したとして右近に明石(兵庫県)六万石を与えたのですが、八七年に九州を平定すると、伴天連追放令を発布するとともに右近にキリスト教を捨てるように迫ります。しかし右近が地位や名誉よりも信仰を選んだため、秀吉は右近の全領地を没収し、翌年には加賀(石川県)の前田家預けにしてしまいます。右近は、命じられるまま流人として前田利家や利長に仕えました。

一六一四年、江戸幕府がキリシタン禁令を発布したことを聞いた前田利長は、キリスト教を捨てれば命が救われると右近を説得したのですが、右近の心を翻すことはできませんでした。追放令に従って右近たちが加賀を徒歩で出発したのは、まだ雪深い二月でした。坂本(滋賀県)に三十日以上軟禁された後、長崎に着いたのが四月中旬です。十一月、日本全国から連行されてきた宣教師や修道女、右近や内藤如庵の家族ら約三五〇人は小さな中国型帆船五隻に押し込められ、マカオ(中国)とマニラ(フィリピン)に分かれて追放されました。すし詰めの帆船の衛生状態は悪く、一カ月の船旅の間に何人もが亡くなりました。右近は、マニラに着いてまもなく重い熱病にかかり、一六一五年二月三日、六十三年の生涯を終えました。

秀吉や家康に恐れられ、官兵衛や利休が憧れた右近の生き方にご興味のある方は、古巣馨著『ユスト高山右近 いま、降りていく人へ』(ドーン・ボスコ社、二〇一四年。本学図書館で貸出可)をお読みになってみてください。

聖マリアンナ医科大学 キリスト教文化センター主催 講演会

講師：東ティモール医療友の会（AFMET）副理事長

山口 道孝 師

今、アジアに生きる、医師・看護師を目指す日本の若者へ



日時：2013年 9月24日（火） 17：30～19：00

場所：聖マリアンナ医科大学 病院本館3階大講堂

《山口道孝神父 略歴》

カトリック横浜司教区・雪ノ下教会協力司祭
東ティモール医療友の会（AFMET）副理事長
任意団体アニーファンド理事長
NPO法人ALL LIFE LINE NET理事
JLMM（日本カトリック信徒宣教師会）元事務局長

山口道孝 神父（カトリック雪ノ下教会）講演会
今、アジアに生きる、医師・看護師を目指す日本の若者へ



山口神父様の講演会に参加して

キリスト教センター長 力石辰也

平成25年度のキリスト教文化センター主催の講演会には、カトリック雪ノ下教会の山口道孝神父様に来て頂いた。アニーファンド (<http://www.anniesfund.org>) 理事長、東ティモール医療友の会 (AFMET <http://afmet.com/>) 理事長でもある山口師は、「今、アジアに生きる、医師・看護師をを目指す日本の若者へ」と題してお話をしてくださった。東ティモールのみならず、アジア各地で長く幅広い支援活動を行っておられる山口師の、実際の経験に基づいたお話には強い説得力があった。カンボジアでの支援活動は、食べ物に群がる八工を払いながら食事を



しなければならぬような環境であったこと、ポル・ポト派に目の前で母親を殺され、その内臓を食べさせられた少女が心を閉ざしてしまっていた例、こどもたちが遊んでいて地雷を踏み、命を落したり、手足を失うだけが負つたりしていることなどのお話によつて、同じアジアの住人でありながら、我々とは全く異なる境遇に置かれた人たちが多数いることを改めて思い知らされた。迫力のあるお話に、聞いていた一人の男子学生は泣いていたし、私の部署である腎臓器外科で臨床実習を行っていた二人の5年生も、講演を聞いて「とても良い話を聞いた。もっとたくさんさんの友達を呼ばばよかった。」と感想を述べていた。聖マリアンナ医科大学では、医学部

学生の受講態度、講義の出席率や成績不振、国家試験の合格率や研修医の採用実績などについてあれこれ頭を悩ませているが、多様なアジアの諸地域のことを考えると、我々がいかに甘い世界の住人であるかということを感じさせら

れる。医師・看護師を目指す日本の若者へ向けた山口師のメッセージは、平和で豊かな日本で医療・医学・看護学を学ぶだけではなく、もっと広い視野をもって世界を知り、考え、行動してほしいということであつたと思う。

では、我々聖マリアンナ医科大学の学生・教職員は実際にどう行動すべきなのか? 甘い世界にいるとはいっても、学生はそれなりに必死だし、多くの教職員は過剰とも思える日常業務と家庭生活で精一杯であるというのが実情だろう。みんなが現地に飛び込んで援助を行うことが出来るわけではないのは当然である。だとすれば、個人としては時間がある時に、援助が必要な人と実際に援助をしている人たちがいるという事実を知り、その人たちのことに思いを馳せ、できる範囲で寄付などのささやかな援助を行うことでよいのかもしれない。一方、大学としては、より具体的な奉仕・支援活動が求められると思う。私は以前から、聖マリアンナ医科大学が存在価値を高める道は、アジアを中心とした地域における医療援助だと考えていた。援助といっても、いわゆる「上から目線」ではなく、むしろ



る学びに行くという方が適切だと思える。公衆衛生の基本や、画像や採血データに頼らずに診断する経験を積んだり、患者さんの素朴な感謝によつて、医師になろうという決意の原点に立ち戻ったりできるかもしれない。具体的な活動についてはこれから考えなければならぬが、現役職員が時間的に難しければ、定年後の職員が中心になってこのような活動をするのもよいだろう。本講演を聞くことによつて、漠然としていた自分なりの考えが、ある程度の具体性を伴って自分の中でまとまってくるのを感じられた。

5月18日
新入生歓迎会



2013年4月15日
新入生オリエンテーション

平成25年度4月から26年度6月
までの活動内容をご報告致します。

キリスト教文化センター活動状況(平成25年度)



10月4日
創立者・教職員等追悼ミサへの
協力・参加

10月3日
解剖ご遺体追悼ミサへの協力・
参加

9月24日
山口道孝師による公開講演会
『今アジアに生きる 医師、看護
師をめぐす日本の若者へ』

8月24日、25日
日本カトリック医師会主催「第
29回カトリック医療関連学生セ
ミナー」への参加



日常風景





11月29日
クリスマスイルミネーション
灯式



12月17日
クリスマスの集い



12月12日
クリスマスコンサート



12月19日
聖マリアンナ医科大学看護学校
クリスマスの集い



6月20日
第一回CC倶楽部「ワインとキ
リスト教」

2014年5月13日
新入生歓迎会



Christian Culture Club (略称：CC倶楽部) について

キリスト教文化センター長 力石 辰也

キリスト教文化センターでは、本年度から Christian Culture Club (略称CC倶楽部) という活動を始めました。この会は全教職員・学生を対象とし、キリスト教の文化や精神を楽しく学びながら、参加者相互の交流を深めることを目的としています。皆さんが良くご存じのように、聖マリアンナ医科大学はキリスト教精神を大切にす



る医科大学であり、大学病院の基
本方針にも「生命の尊厳とキリスト教の愛の精神を規範とする医療人を育成します。」と謳われています。ところが、これまで本学には、医学部の学生は別として、教職員の皆さんがキリスト教の精神に触れたり学んだりする機会ほとんどありませんでした。キリスト教について学ぶ会というと、キリスト教への入信を勧めるものではないかと心配される方も多いと思いますが、CC倶楽部は信仰で



はなく、文化や教養としてのキリスト教を学ぶ会です。また、学生をはじめとして、多くの職種の方に御参加頂いて、学内の異業種交流会となることも期待しています。

記念すべき第1回は、6月20日、講師に三宅良彦学長をお招きし、「ワインとキリスト教」と題した講演をして頂きました。キリスト教とは切っても切れない関係にあるワインについて学んだあと、学長が特別に用意してくださった本場のワインを飲みながら参加者同士の交流を深め、好評のうちに終了しました。第2回は7月25日に行われ、「ビールとキリスト教」

ついて、腎泌尿器外科の土居由美さんがお話をした後、修道院ビールの味見をしました。用意した修道院ビールは全てなくなり、ビールやアルコールとキリスト教の関係を学ぼうという皆さんの強い意欲が感じられました。

CC倶楽部ではお酒だけではなく、食文化・美術・音楽・文学・歴史・建築など幅広く扱う予定です。毎回の参加が無理な方でも、興味のある回だけに参加したり、遅れて参加したりすることも歓迎です。皆さんどうぞお気軽にお越しください。開催日時はスタッフメールと学内のポスターでご案内しています。



つどいが紡ぐ人々の輪

医学部 4 年 木村 未祐奈



そのポスターを最初に見かけたのは、キリスト教文化センターに久しぶりに足を運んだ時だった。キリスト教文化に触れるつどい「第一回テーマ・ワインとキリスト教」は、こ

会なのだろうか？ポスターに記載されていた「三宅先生のお話」をうかがいたくて、つどいが開催されるその日を心待ちにしていた。
当日、三宅先生がお話される部屋の扉を開けると、神父さんや先生方、シスターの方々、学務課や教育課の方、学生などで既に満席だった。三宅先生は、キリスト教に關係する様々な国のワインのエピソードをその地域の写真と共に紹介してくださったので、まるで世界中を旅しているようだった。本日はただワインへの知識と期待が高まったところで、ラウンジに移動して皆で乾杯をした。ラウンジでは、様々な種類の美味しいワインとチーズなどのおつまみをいただきたながら、先生方と色々なお話しをした。普段は授業以外で直接は先生方のお話をうかがえる機会は少ないので、とても

貴重な経験となった。更に先生方とだけではなく、学務課や教育課の方も交えてお話しすることができた。先生方と職員の方々が学校をより良いものにしていくこうとお話しされているのを聞いて、聖マリアナ医科大学の明るい未来を感じた。
ふと周りを見渡すと、美味しいワインとおつまみを真ん中にして人々の輪がいくつもできていくことに気づいた。そうか、これはキリスト教文化を糸として人々をつなぐ会だったのか。

このつどいの目的は、教養としてのキリスト教文化を楽しく学ぶことである。つどいでは文化を皆で「楽しく」共有するから、自然と人々がつながっていく。このつどいが、そしてテーマとなる文化が、人々を巡り合わせるきっかけとなっていくのだ。

つどいは、まだまだ人々を紡ぎ始めたばかり。今後、どんな文化が人々をつないでいくのか楽しみだ。



教学部 学務課 主任 山崎 貴史

このたび、平成26年4月1日より、キリスト教文化センターの事務局担当を拝命いたしました。4月の新入生オリエンテーション、5月の新入生歓迎会、公開講演会、本学の学生が参加する(MCC・管弦楽団)12月のクリスマスコンサート、クリスマス集い、また、



マリアの宣教師 フランシスコ 修道会 重藤 悠美子

はじめまして。マリアの宣教師 フランシスコ修道会の重藤悠美子と申します。

今年の4月から火曜日と金曜日に 聖マリアナ医科大学キリスト教文化センターにお世話になっていきます。どうぞよろしくお願致します。昨年1年間は福島県南相馬市に派遣されていました。被災地にいるいろいろな立場の方々と出会い、一緒にお話や作業をするうちに言葉に言い尽くせない思いを抱いてこられた方々の静かな「底

力」に心を動かされ、頭が下がる思いでした。各地から来られた若いお医者さんたちにも会いました。仮設を訪問して健康相談にのったり血圧を測ったりして、住民の不安や心配事に向き合っておられました。東北は地理的には遠いかもしれませんが、心理的な距離はなくせるようにと願ってキリ文の一角に被災地の小さな展示をしています。どうぞ立ちよってください。これらの言葉に触れてください。忘れないでいてください。皆さんのキリ文がある時には、きびしい勉強の合間のほっとした空間となり、またある時には書物を通して「未知なるもの」に出会うひと時となりますように。



頭ヶ島天主堂 (かしらがしまてんしゅどう)

去る 9 月17日、政府は2016年の世界文化遺産登録候補として「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」をユネスコ（国連教育科学文化機関）に推薦することを決定した。

この天主堂も世界文化遺産のリストの一つになっており、長崎県五島列島の新上五島町頭ヶ島にある。1919年（大正8年）に鉄川与助の設計・施行により、9年の歳月を掛けて島の信徒たちが、山から切り出した石を積み上げて造ったと伝えられている。

現在も建設時の原型通り保存されており、全国的にも珍しい石造りの教会である。

現在、国の重要文化財に指定されている。

文と絵 岩下 光幸（キリスト教文化センター）

キリ文便り（編集後記）

平成20年からキリスト教文化センターの事務職員として勤務されていた中村真理さんが、平成26年3月末をもって退職されました。お疲れ様でした。4月からは毎週火曜・金曜日と、第2・4土曜日にシスター重藤（マリア）の宣教師フランシスコ（修道会）がキリ文に来てくださっています。シスター重藤は教員としての豊富な経験があるばかりではなく、西アフリカのガーナや、東日本大震災の被災地でも活動してこられました。シスター重藤のお話を聞くためだけでもキリ文に足を延ばす価値がありますから、皆さんどうぞお気軽にキリ文にお立ち寄りください。

シスターがいらした西アフリカは、今エボラ出血熱の脅威にさらされています。平成26年8月の時点では日本での患者発生の報告はありませんが、このような事態にも関心をもち、何かできることはないか、考えてみることも必要だと思っています。

「いぶき」は通算第81号になりました。主としてキリスト教文化センターの活動に関連した文書や写真を掲載していますが、皆さんからの寄稿も歓迎です。ちよつとしたコラムや短文を

発表したいが、その場所を探しているという方はご相談いただければ幸いです。
（キリスト教文化センター長 力石 辰也）

本棚から

次の本を購入しました。皆様のご利用をお待ちしています。

加藤眞三著

「患者の力」 春秋社

患者学で見つけた医療の新しい姿！

デーバック・チョブラ、ルドルフ・E・タンジ 共著

村上和雄監訳、大西英理子訳

「スーパーブレイン」 保育社

脳に使われるな、脳を使いこなせ、最高の人生を！

村上和雄著

「今こそ 日本人の出番だ」 講談社ブラスアルファ新書

「逆境の時こそ」 やる気遺伝子」 はオンになる！

矢作直樹・村上和雄著

「神（サムシング・グレート）」と見えない世界」 祥伝社新書

発行 聖マリアナ医科大学
〒216 8511 川崎市宮前区菅生2 16 1
編集 〇四四（九七七）八一―
印刷 力石 辰也
城南印刷センター